

道徳的価値に照らしながら対話で深め合う道徳科の授業づくりと評価の在り方

加古川市立別府小学校

教諭 萩野 奈幹

1 取組の内容・方法

本校の研究主題「主体的に考え、よりよく生きようとするべふっ子の育成～道徳的価値に照らしながら対話で深める道徳科の授業づくりと評価の在り方～」の実現を目指し、道徳教育推進教師として実践研究を推進してきた。本稿は、道徳的価値に照らしながら、対話で深めるという方策をもとに、道徳科の授業づくりと評価の在り方に関する学校及び筆者の実践の具体を踏まえ、研究の成果と課題を提示する。

なお、本研究内容は「平成 30 年度 兵庫県道徳教育実践研究発表会及び東播磨・北播磨地区 小学校道徳教育研究大会」¹において、実践発表した内容の一部を含むものである。

(1) 「主体的・対話的で深い学び」を指導過程に組み込む

授業では、主体的な学び（主）、対話的な学び（対）、深い学び（深）を指導過程に鍵となる視点として位置づけ、対話で深め合うことを目指した。そのため、指導と評価を連動させた別府小式指導案²を基に、鍵となる視点や指導のねらいの側面から、どのようにねらいに迫り、どのような視点で学びを見取るのかを検討し実践を行ってきた。以下、実践を通して、鍵となる視点を授業で活かすために有効であった手立てを示す。

【主体的な学び】問題意識をもたせたり、自分との関わりで考えさせたりする場面

- ・問題意識をもたせるために、「このお話の中で、みんなで考えてみたいことはありますか。」と導入場面で問う。
- ・導入でアンケート等の結果を示し、そこから考えるきっかけや問題意識を生み出す。
- ・児童が考えたくなる発問を工夫する。
- ・ペアやグループでの話し合いを通して、どの子も参加し話せる場を設ける。
- ・教材を基に、ねらいに即した役割演技、問題解決的な学習等を効果的に取り入れる。

【対話的な学び】協働的に対話できるよう促し、多面的・多角的に考えさせる場面

- ・主題に関する多面性を子どもの言葉で捉え直したうえで、補助発問や問い返しを行う。
- ・子どもと子どもの声をつなぎコーディネートしながら、対話を促進させる。
- ・板書の挿絵を活用し、登場人物の表情に着目させて対話を促す。
- ・どうするのがよいかという方法の出し合いにならないようにする。
- ・一問一答の発問や教科書に書かれていることは、対話場面で多く問わない。
- ・対話の時間を十分確保する（中心発問で 20 分程度）。
- ・机配置を変え、他者を意識できるよう学習形を工夫する（コの字型やサークル型）。
- ・聴き合える学級集団づくりに努める。

（対話を促進させる言葉がけ）

- ・～さんの考えについてどう思う？
- ・～さんに付け足しや、お尋ねがある人？
- ・～さんの言ったことを説明してくれる？
- ・自分の言葉で言い換えてくれる人？

【深い学び】道徳的価値についての理解を基に自己の生き方について考えを深める場面

- ・ねらいに迫る補助発問で深める。
- ・役割演技をして主人公の思いに迫り、動作やしぐさから多面的に考えさせる。
- ・問題解決的な学習では、自分の考え（立場）をもたせ、全員の考えを視覚的に板書などに提示し、そこから補助発問を生かして考えさせていく。
- ・思考を促す板書を工夫する。
- ・終末場面で、自己を見つめる時間を確保する。



（考察）

教師が、本時の主題やねらいに迫るために、どのような子どもの姿を描くのか。そのために、教師の“しかけ”を創造し、授業の中でアプローチしていくのが重要である。

授業者であり評価者である教師が、児童のよりよい生き方に向け、道徳科の授業をどう捉えるかにより、指導観（評価観）が変わってくると思われる。

（2）道徳科における記述式の個人内評価に向けた取組

評価においては『学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』に記されている評価の視点例を手掛かりに実践を行ってきた。そのため全職員に共通理解を図り、個人内評価を前提に、①一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、②道徳的価値を自分自身との関わりで深めているかの2点を重視し、学習状況や道徳性に係る成長の様子を学習過程に着目し見取るようにしてきた。本節では、第6学年の筆者の実践を基に、指導と評価を連動させた授業の概要と見取りから記述式個人内評価に至る過程を一例として示す。

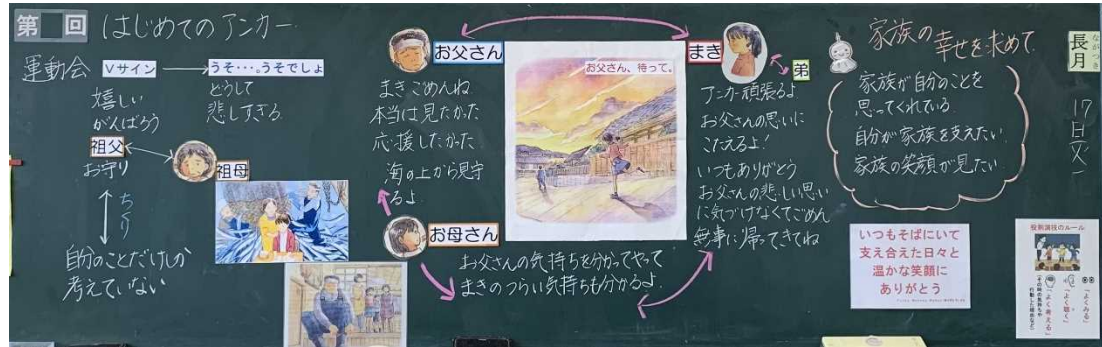
第6学年の実践例

- 1 主題名 家族の幸せのためにできること（C-15 家族愛、家庭生活の充実）
- 2 教材名 はじめてのアンカー（小学生の道徳6 廣濟堂あかつき）
- 3 ねらい 運動会へ行って応援したい気持ちを抑えて漁に向かう父の思いと、その思いに気付く父を追いかけるまきの思いを多面的に考える学習を通して、家族が互いに信頼し合うことの大切さやよさについて理解を深め、家族の幸せを求めて進んで役に立とうとする道徳的実践意欲を高める。
- 4 評価の視点
 - ・父の気持ちを知ったまきの思いについて考えることを通して、家族の愛情に気づき、家族のために役に立つことの大切さとよさについて多面的・多角的に考えようとしている。
 - ・自己を振り返り、家族の幸せのために進んで役に立とうとすることについて自分のこととして捉えようとしている。
- 5 授業の様子と板書

演者のまき役には、てるてるぼうずを持って、父を追いかける場面を即興的に演じさせた。父役は、肩を落として歩き、まきの言動に反応する場面を設定した。

演者、観衆の指摘や演者の感想から対話を促し、反省、謝罪、感謝を込めて自分ができ

ることをしようとする思いとその理由を多様に引き出した。補助発問を生かし、父を追いかけるまきの心の根底には、家族のために役に立ちたい、家族を支えたいという家族の幸せを願う思いがあることに気付けるよう対話を促した。終末は、導入で用いた家族愛に関する音楽を流し、感性に訴える指導法を取入れた。



(3) 見取りから記述式個人内評価へ

【ワークシートの記述】

私は、この学習で家族の温かさや心強さを身にしみて感じました。ケンカしていても、はなれるとさみしくなり、いなくなって初めて家族の大切さに気づく感じでした。離れていても家族の思いは伝わることを実感しました。

【評価方法】 ワークシート・発言・観察

【見取り】 ○○さんのワークシートの記述や発言から、離れてみて家族の自分に対する思いや願いについて多面的に考えようとしていることが分かる。また、現在の自分を振り返り、家族に対し感謝を込めた思いを抱き、その思いを家族の幸せのために伝えようとしていることが記述から伺えた。

記述式個人内評価

【朱筆】

「初めてのアンカー」の学習では、まき役になって演技することを通して、家族の温かさや互いに支え合うことの大切さについて考えを深めていました。家族に対し「ありがとう」という思いをこれからも大切に、家族の幸せを願い、支える一人であって欲しいと願っています。

(考察)

道徳科の評価は、どうしても主観的にならざるを得ない側面がある。また、担任教師が、1時間の授業の中で全ての児童を見取ることへの限界もあるだろう。だからこそ、一人一人の学びのプロセスに寄り添いながら、長期的な見通しの中で「一人一人のよさを認め励ます個人内評価」を行っていくことや、広い視野から子どものよさを見取り、価値づけることが、教育的な意味をもつと考えられる。

道徳科の授業の中で、ねらいに迫れているかどうかの判断が難しいと思われる記述や発言であったとしても、その事実を実践との関わりで受け止め、授業改善に向けた働きかけが必要であると考えられる。

(4) 子どもの心を育む環境づくり³

道徳科の学びが、道徳教育の要としての役割を果たすために、毎時間の学びの足跡を教室に掲示することや、道徳通信の発行や学期に1回程度「家庭道徳」を実施した。道徳科の学びを学校生活や家庭において対話を促す環境づくりを図った。



校内に道徳通信を掲示



学びの足跡を教室に掲示

2 取組の成果

- (1) 学校全体で研究を進めていくことにより、教師の「対話で深め合う」ことに対する意識が高まり、発問の工夫やねらいに迫る問い返しや効果的な指導方法を指導過程に盛り込んだ授業づくりを行うことができた。道徳科の目標を踏まえ、形式的な授業に陥ることなく、多様な指導方法を生かすことや、教材を発展的に捉えるなど指導方法に幅が生れたように思われる。また児童は、よりよい生き方について主体的に考え、本音で話す姿が授業で多く見られるようになった。さらに、道徳の授業で培われた対話力が、他教科でも生きていることが伺える。
- (2) 評価については、子どものための評価の充実を目指しワークシートの朱筆を通して対話を行い、授業改善に繋げることを意識するようになった。学校全体で、家庭道徳や道徳通信を発行することにより、保護者に対して道徳科の評価についての理解を図ることに繋がったと思われる。こうした取組により教員が、教科とは異なる評価観をもつことの重要性に気付き児童の心に寄り添った道徳教育に取り組むことができた。

3 課題及び今後の取組の方向

授業づくりでは、児童の思考を対話で深められるよう、さらに教師のコーディネート力を上げていくことが必要である。そのために、授業を積極的に参観し合うことや、チームで授業を検討する機会を今後も継続させ、教員相互で学び合う研修の在り方の工夫が必要である。評価については、日々のワークシートの朱筆や児童との対話のやり取りを大切に、継続性をもたせることが、道徳性を育むことに繋がってくると考える。今後は、業務改善を視野に入れながら、いかに評価活動を充実させていくかが課題である。

【註】 1 加古川市立別府小学校 (2018) 『研究紀要』。

2 兵庫県教育委員会 (2019) 『指導資料 道徳科の全面実施に向けて』, 11-14 頁。

3 前掲書 1, 11 頁。